



Nov. 29, 2017

SITAシンポジウム40回記念
パネルディスカッション

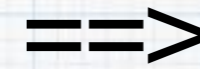
韓太舜

情報通信研究機構 (NICT)

SITA = **S**ociety of **I**nformation **T**heory
and its **A**pplications 小史

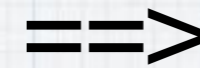
- 1948 Shannonが革命的論文を発表
- 1950 第1回 IEEE Symposium on Information Theory
(London) =ISIT
- 1952 インフォメーションセオリー研究会・発足 (IEICE)
- 1966 インフォメーションセオリー研究会・解散 (IEICE)
- 一斉退場 => dead field! <— 氷河期 —>
- 1977 第20回 ISIT (Cornell) に有本, 杉山が参加 (<= 偶然)
- 1978 第1回 SITA (KOBE) (<= 必然)
- 1986 SITA の学会化
- 1988 第27回 ISIT (KOBE) <— SITA が支える
- 1990 第1回 ISITA (Hawaii) = International SITA (すでに 14回)
- 2010 SITA --> IEICE (====> 世代交代) =technically sponsored
by IEEE IT

⁼³ ● シンポジウムは3泊の泊まりがけで行うこと。そして、可能な限り「温泉地」で開催すること。これは、1波をシンポジウム会場に充満させ、参加者達が相互の人間的な交流を図ることを可能にし、充分relaxした状態で研究活動に専念出来るようにするためである。とくに、所属大学が異なる研究者達の活発な議論を喚起することを眼目とする



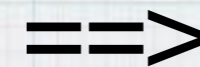
多くの得難い研究仲間に巡り合う、
特に数学者との出会い
(井原先生, 柳先生)
さらに、大学横断的な共同研究

⁼³ ● 夜のworkshopは必ず行うこと。これは、emergingな最新のトピックスを幾つか取り上げ、現役バリバリの若手研究者に2, 3時間掛けてジックリ易しく解説してもらうためである（



研究に対する広い視野と複眼的な思考を養う
(stimulating & inspiring:
異物の衝突が創造を生む)

⁼³ ● 学会化はするが、「同好会のような雰囲気」は可能な限り保持すること、学会としてのJournalは刊行しないでNewsletterだけ発行する、



事務作業の最小化により研究時間の最大化を図る
(自由闊達な議論が第一)

SITAの意味

第1段階 ●⁼³温泉の花が咲いた (SITA)

第2段階 ●⁼³研究の花が咲いた (SITA)

第3段階 ●⁼³「恋」の花が咲いた(SITA)

研究活動の形態

- ⁼³ ● 「上場企業」としての研究活動： <== (計画性が第一)

基本方針：「必然を必然とせよ」

市場調査 → 投資計画 → 生産活動 → 製品 → 販売

- ⁼³ ● 「Venture企業」としての研究活動： <== (締め切りがない場合にお勧め)

基本方針：「偶然を必然とせよ」

自らの心の奥深くからの声に耳を傾けよ

→ その声の方向にアンテナを建てよ

→ 受信信号 (偶然) に「**独自の定式化**」 (必然) を与えよ

→ その定式化を展開せよ

→ 論文 → 発表

永遠に真理なるもの、我を惹きて行かしむ

(ファウスト)

==> 真理に魅せられるかどうか、
研究の良し悪しを決める

「人は何のためにSITAに行くのか」

答え：

「温泉に出会うため」(世を忍ぶ仮の姿)

その心は：

「真理に出会うため」

